令和５年度　海外派遣研究員研究報告書

令和６年６月２４日

日本大学理事長　　殿
日本大学学長　　殿

所　　属　国際関係学部（国際関係研究所）
資格・氏名　准教授・川口　智彦
■本報告書の内容を公表することは了承しております。
（公表可の場合，チェック■すること）

令和５年度海外派遣研究員（短期Ｂ）の研究実績を，下記のとおり報告いたします。

記

１　区　　分　　短期Ｂ

２　研究課題

ブータン王国のツーリズムに関する調査～北朝鮮のツーリズムとの比較～

３　派遣期間　　西暦　2024 年 3 月 12 日～2024 年 3 月 27 日

４　派　遣　先　　ブータン，タイ，韓国，ベトナム

５　研究目的

北朝鮮もブータン王国もいわゆる自由旅行は認めていない。政治体制も国際政治の立ち位置の全く異なる両国ではあるが、ツーリズムを自国の経済発展の有効な手段としているところは同じである。本研究ではブータン王国のツーリズムを調査し、それと北朝鮮のツーリズムとを比較検討をする。

６　研究概要

ツーリズムは、途上国においてのみならず、先進国においても大きな経済効果があることは自明である。とりわけ工業インフラの整備が進んでいない、あるいは諸条件に規制され、それ自体が不可能か極めて困難な国においては、ツーリズムを経済発展の主柱としているケースも多い。

国内の産業基盤形成の様相は異なるものの、相対的に GDP が低いブータン王国と北朝鮮がツーリズムを経済発展の主柱の一つ、外貨獲得の主要な手段としている点は共通している。そして、両国共に外国人観光客のいわゆる自由旅行を一切認めていない。

そのためは、意味は全く異なるものの、両国は「秘境」としてのツーリズムを前面に押し出している。また、ブータン王国は、エコ・ツーリズムにも力を入れているが、北朝鮮も 2023 年 8 月 30 日に開催された最高人民会議常任委員会第 14 期第 27 回全員会議で採択された「観光法」には「生態環境を積極的に保護すること」が盛り込まれている。

報告者は、そもそも北朝鮮研究者であるが、今回、北朝鮮におけるツーリズムの今後の方向性を考える材料として、「秘境」ツーリズムという点及び個人計画ではなくパッケージでの観光や現地ガイドの随行等、定められた条件でしか訪れることができない北朝鮮とブータンは共通しているため、ブータン王国の事例を調査することにした。

本研究では、ブータン王国に観光旅行に行くための日本国内における手続きから始まり、同国に至るまでの経路や費用、国内での移動方法や宿泊施設、物価等を実際の観光旅行を体験することでその実態を明らかにし、北朝鮮を旅行する場合と比較検討する。

北朝鮮のツーリズムに関する研究(例えば、礒﨑敦仁『北朝鮮と観光』毎日新聞出版、2019)は存在するものの極めて限られているばかりか、「秘境」ツーリズムという視点から他国の「秘境」ツーリズムと比較している研究は存在しない。したがって、ブータン王国のツーリズムが北朝鮮のツーリズムに対して持ち得るインプリケーションを解明することが本研究の意義となる。

なお、本報告の北朝鮮関連部分については、報告者の過去における訪朝時の調査等に基づくものであり、本海外派遣とは直接的な関係が無いことを申し添えておく。

7　研究結果・成果

(1) 研究日程

本研究の主たる目的は上記の通りブータンと北朝鮮のツーリズムの比較であるが、ブータンに向かう航空便の出発地等の都合もあり、往路で韓国・ソウル（3/12～3/14）とベトナム・ハノイ(3/14～3/17)、タイ・バンコク(3/16～3/17)を経由した。

ソウルでは北朝鮮研究者（北韓大学院大学）とツーリズムに関する意見交換をし、情報を収集した。

ハノイでは北朝鮮と同じ社会主義国でありながらドイモイ（刷新政策）を推進したベトナムの経済発展の様相とその中に残る社会主義的な側面についてハノイ市内を歩きながら視察した。僅かな時間ではあったが、分断国家である北朝鮮と異なり、社会主義統一国であるベトナムは中国同様に市場経済システムを大胆に導入できていることが確認できた。

ベトナムからバンコクに向かい、3 月 17 日の早朝便でブータンへ向かい、3 月 26 日午前便でバンコクに、その夜の便で羽田に戻った。バンコクは乗り換えの経由地として使っただけで、同地では研究活動はしていない。

(2) 北朝鮮観光旅行の申し込み手続き

報告者は、2010 年、2014 年、2019 年と 3 回、北朝鮮を観光目的で訪問している（一般人の観光目的以外の入国は原則的に認められていない)。

本報告書執筆時点（2024 年 6 月）では、北朝鮮はコロナの影響で閉鎖した国境を徐々に開放している状況にあり、国際観光ではロシア人の観光客のみを受けて入れている。以下では、国境閉鎖以前の状況について述べておく。

北朝鮮を観光目的で訪問するためには、海外にある北朝鮮の「朝鮮国際旅行社」と取引がある旅行社を通して予約する必要がある。報告者は、2010 年と 2014 年はそれぞれ大連（日本系）と北京（英国系）にある旅行社、2019 年は東京にある総連系の旅行社を通して予約をした。予約は、マスコミ関係者など一部の職種に従事する人以外は特段の

支障なく受け付けられる（その後、日本人が海外の旅行社を通して予約をすることについては厳しくなった）。

訪問先はリクエストすることが可能で、顧客が旅行社に訪問先をリクエストすると「朝鮮国際旅行社」に打診し、リクエストの可否が決まる。可否は、その時の北朝鮮の政治状況や国際関係に左右されるので、一部の定番訪問地を除いては、その時次第ということになる。それだけではなく、現地においてリクエストで可となっていた訪問地が変更されることもある。例えば、2019 年の訪朝では、訪朝直前に台風が北朝鮮を直撃し、いくつかの訪問地がキャンセルされてしまった。

北朝鮮ビザに関しては、北京発の平壌便を利用することが多いので、平壌空港で現地の職員から手渡される。報告者の 2010 年の訪朝は、中朝国境の丹東から列車で越境したので、丹東の駅で渡された。ビザの申請は、形式的な書類が揃っていれば問題なく発行される。

2010 年の旅行の際、「朝鮮国際旅行社」のガイドから海外の旅行社を通さなくても自分たちに直接連絡をくれれば旅行をアレンジできると、メールアドレスなどが記された名刺を渡された。帰国後に、お礼を兼ねて当該メールアドレスにメールを送ってみたが、サーバーから不着のレスポンスはなかったものの、ガイドからの返信は来なかった。こうしたことからすると、直接連絡する方法は現実的ではないと言える。

(3) ブータン観光旅行の申し込み手続き

北朝鮮の場合と同様に、ブータン観光も旅行社を通して予約するのが一般的である。報告者は、東京にある旅行社を通してブータンの観光旅行をアレンジしてもらった。訪問先のリクエストも北朝鮮同様に東京の旅行社からブータンの旅行社（旅行期間中に、同社のブータン支店と判明）にリクエストを出す。日程が許せば、基本的にはどこでも訪問ができ、政治的な理由で訪問が不可になることはない。報告者が訪問していた期間、インド首相のブータン訪問があったが、その期間は首都の一部の地域や施設の観光が制限されたとのことだった。

ビザは電子ビザで、日本の旅行社を通して形式的な申請をしていれば、出国前に受け取ることができる。

ブータン旅行の場合は、海外にある旅行社を通して予約することなく、直接、ブータンの旅行ガイドに連絡をすることで旅行ができることが旅行中に判明した。手順は訪問先のリクエスト、ガイドによる確認、旅行代金の払い込みとなるとこのとだが、初回ではガイドと連絡を取ることができず、仮に連絡先が分かっても見ず知らずの人に高額の旅行代金を送金するということは現実的ではない。

しかし、ブータンのガイドは帰国後の研究報告に必要なバックアップ情報をメールで求めるとほぼ当日中に調べて返信をくれるなど、レスポンスも良いし信頼できるので、今後、訪問する機会があれば利用可能な方法だと思われる。

(4) 旅行代金の内訳

北朝鮮の場合は、「朝鮮国際旅行社」の国定価格であり、旅行代金の内訳は一切公開されていない。海外の旅行社を通して申し込む場合は、「朝鮮国際旅行社」が提示する北朝鮮国内での一切の費用（個人的な土産物等は除く）に国内出発地と平壌間の往復運賃

（空路または鉄道）が加算される。

このようにパッケージ化された旅行の費用が安いのか高いのかを判断するのは難しいが、旅行の経路や形態こそ異なるが、地理的に近い韓国と比べると高い。

一方ブータンに関しては、旅行代金の内訳の一部が公開されている。ブータン政府は観光旅行で入国する者に対して持続可能な開発料金 （Sustainable Development Fee, SDF）を支払わせており、報告者が訪問した時点では 1 日 100 米ドルだった。ブータン訪問中に偶然、話をする機会があったブータン野党の副代表によると、元々65 米ドルだったが、新型コロナの期間中の減収をカバーするために 200 米ドルに値上げしたところ観光客が激減し、100 米ドルに値下げしたとのことだった。

また、以前には国定の 1 日の 1 人当たり最小旅行費用（Minimum Daily Package Rate, MDPR）－宿泊代、交通費、ガイド費用を含む－という制度があり、概ね 250～290 米ドルであったが、今は廃止されたという。

ガイドによると、個人（1 人）旅行の 1 日平均の費用は 450～600 米ドルとのことで、宿泊するホテルのクラスにより大きな差が出るという（1 泊 1200 米ドルという豪華なホテルもホテルの PR ということで内見させてもらった)。

観光収入はブータン政府にとって重要な歳入の一つではあるが、オーバーツーリズムによる環境破壊を防ぐことも重要な目標としているので、適切な金額を設定するのには苦労しているようだ。

(5) 旅行の形態

日本で一般的に紹介されているブータン旅行の形態は、基本的に仏教関連施設（寺院等）の訪問とトレッキング（日帰り～27 日間コースまで）となる。しかし、ブータン旅行中に分かったことは、その他にもフィッシング・ツアー、カヤッキング・ツアー（インド人が好むとのこと)、バードワッチング・ツアー（欧米人を多く目撃)、自転車ツアー、オートバイ・ツアー（欧米人のグループを目撃）も存在するということだ。いずれのツアーにも後述するガイド同行が条件とされている。

一方、北朝鮮の場合は、平壌、開城、板門店という 3 泊 4 日程度のコースが一般的であるが、海外の旅行社は、登山（妙香山、金剛山、白頭山など）ツアー、金日成主席の誕生日に開催される記念マラソン・ツアー、サイクリング・ツアー、田植え体験ツアーなども企画商品として準備している。

ブータンと北朝鮮の共通点としては、いずれの国も外国人による観光収入を重要な歳入の一つとしてしており、良好な自然環境や従来の生活様式を活用した観光を展開できるという点だと言える。

(6) ガイド付き観光

北朝鮮もブータンもガイドが同行しない外国人観光は許可していない。北朝鮮は主として政治的な理由から、ブータンは環境保護とガイドの生活保障の観点からこうした制度を導入していると思われる。北朝鮮は観光客の母語が話せるガイド２人と運転手１人の体制、ブータンは観光客の母語が話せるガイド１人と運転手１人の体制で観光客を案内する。

しかしながら、上記のような理由もあり、北朝鮮とブータンでは旅行の自由度に大き

な違いがあることが分かった。

北朝鮮の場合は、基本的に外国人観光客はホテルあるいはホテルの敷地外に出ることはできない。北朝鮮のガイドの話では、ある日本人が無許可でホテルから出て平壌市内を歩き回り、住民に通報されてガイドが連れ戻したという。その日本人については、旅行を中断して即刻帰国されることもできたのだが、日程を最後まで消化させる寛大な措置が取られたとのことだった。

北朝鮮のガイドは、外国人を「監視」することが仕事のように言われているが、そうした役割はあるにせよ、外国人を保護したり、旅行をより有意義にしたりする役割も担っている。

報告者は北朝鮮訛りの朝鮮語を話し、朝鮮に関する知識も持ち合わせた、ガイドからすれば「友好的人士」なので一般化することはできないかも知れないが、旅行中は日本人の悪口を言う人に注意をしたり、地下鉄駅のホームに掲示してある『労働新聞』を撮影していた際に注意しに来た駅員に事情を説明してくれたりしていた。また、日程から大きくい離脱しない範囲内で、報告者の追加・変更リクエストを叶えるためにあちこちに電話をしてくれていた。

一方、ブータンについては、予定された日程はガイドと一緒に過ごすが、日程開始前と終了後、つまり朝と夕方以降は基本的にガイドなしで自由に行動ができる。ガイドには観光客を監視する義務はなく、北朝鮮のガイドと異なり、観光客と同じホテルに宿泊しないこともある。もちろん、観光客の安全には配慮してくれ、報告者が朝の散歩で遠くまで行き、予定されていた朝食時間に遅れたときなどは随分心配をしてくれた。また、ブータンに関しては寺院など宗教施設で守るべきルールがあり、それらについてもアドバイスしてくれる。日程を離脱しない範囲内での追加・変更リクエストは、北朝鮮のガイド同様に一生懸命対応してくれた。

(7) 言語とガイド

北朝鮮旅行の際に同行するガイドは「朝鮮国際旅行社」の社員であり、平壌外国語大学などで外国語を学んだ人々である。2010 年に訪朝した際に案内してくれたガイドは、平壌外国語大学日本語学科出身だという。彼が平壌外国語大学に入学した時期は 1990 年、金丸訪朝などで日朝関係が進展しかけていた時期だったので、日本語需要が増えると見込んで入学したが、その後、日朝関係は全く進展しなくなり、日本語需要はほとんどなくなってしまったと残念がっていた。

一方、今回、ブータンで報告者を案内してくれたガイドはフリーランスで、ガイドの仕事がないときは家で農業に従事しているという。日本語については日本人観光客を案内しながら学んだとのことだった。独学とは言え、このガイドの日本語能力は高く、特に宗教関係の説明は日本語でしてくれたのでとても分かりやすかった。一方、政治・経済に関する話は日本語では語彙が不足し、これらについて話をするときは英語に切り替えていた。

ブータンの学校では、国語（ゾンカ語）以外の科目は全て英語により教えられており、英語は基本的に誰でも話せるとのことだったが、人によりかなり格差があった。また、ガイドによると、ブータン人はインドの公用語であるヒンディー語が分かるとのこ

とだったが、その理由はブータン人はインド映画を子供の頃からよく見ているので、自然にヒンディー語を学んでしまうとのことだった。

案内員には専門の外国語があり、上記の英語、ヒンディー語に加えて、欧州の主要言語、中国語、日本語、ロシア語などだという。

ガイドになるためには、国家資格と定期的な研修が必要で、新型コロナ前は活動中資格保有者が 3000 人ほどいたが、コロナの影響で観光客が減少し、今は 2000 人ほどとのことだった。男女比では男性が圧倒的に多いが、女性も増加中とのことだった。

コロナの影響でガイド職を離れた人は、オーストラリア、米国、カナダなどに移民し、現地で家事手伝いなどに従事しているとのことだった。

(8) インフォーマット（情報提供者）

北朝鮮については、事前にアポイントメントを取り、インタビュー調査をするということは事実上、不可能に近い。そのため、北朝鮮に関する多くの情報はガイドとの会話やガイド同士の会話の中から得ることになる。現地の人に声をかけることは禁じられてはいないが、どこの国でもそうであるように、見ず知らずの人に突然声がけをして、質問を始めるという行為は常識外である。

そのため、とりわけ北朝鮮では、ガイドや運転手との良好な人間関係を構築することが重要であり、前述したように言語、知識などを総動員して「友好的人士」と認識してもらう必要がある。

この点については、ブータンでも同じで、日程の前後で街を自由に散策することができるにしても、やたらと人に話しかけることなどできない。ブータン人の対日感情は極めて良く、ゾンカ語で「おはよう」と声をかけるとにこやかに「おはよう」と返してくれ、特に老人はゾンカ語で何か聞いてくるが、報告者は分からないので英語で聞き返しても、会話は成立しない。そうなるとやはり、ブータンにおいてもガイドからの情報に頼る部分が大きくなる。

ガイド以外で比較的自由に話せるのが、レストランのウェイトレスである。報告者は、中国で北朝鮮が経営する「朝鮮食堂」を多く訪れたが、食堂により差はあるものの、レストランのウェイトレスと色々と話ができるケースもあった。実は、今回のハノイ訪問の一つの目的はハノイにある「朝鮮食堂」を訪れることであったが、前年ながら、報告者が訪問する数週間前に閉店してしまった。

ウェイトレスと色々な話をするためには「友好的人士」と認識してもらうことが前提となるが、とりわけ、中国・延吉のカラオケ施設がある「朝鮮食堂」のウェイトレスとは北朝鮮歌謡を歌いながら色々な話ができた。ふざけているようだが、最新の北朝鮮歌謡を上手に歌い上げることも「友好的人士」の重要な証となる。

ブータンでは、基本的に夕食はガイドとは別々に 1 人でホテルの食堂で食べることになる。客が多く、ウェイトレスが忙しそうにしている時間帯は会話をすることは難しいが、客がいない時間帯であればウェイトレスは、話し相手になってくれる。ホテルで働いているウェイトレスは、基本的に英語は上手に話せるので、会話をする上で問題はない。

北朝鮮もブータンもそうであるが、難しい話はせずに、日常的な話をしていく中で当

該国の社会や文化についての理解を深めることが重要である。

(9) 本海外派遣研究の社会還元

報告者は、本派遣研究で得た知見を社会還元するために既に下記の２つを実施した。

・東北アジア未来構想研究所(INAF)第 23 回研究会で、「ブータン：北朝鮮との若干の比較」というテーマで発表した。

https://inaf.or.jp/uncategorized/%e5%b7%9d%e5%8f%a3%e6%99%ba%e5%bd%a6%e3%83%bbinaf%e5%89%af%e7%90%86%e4%ba%8b%e9%95%b7%e3%81%ae%e8%ac%9b%e6%bc%94%e8%b3%87%e6%96%99/

・報告者が書いている北朝鮮研究ブログ「北朝鮮報道で書かれないこと(dprknow.jp)に「2024、ブータンなど」というシリーズで今回の派遣研究の余談などを書いた。

http://dprknow.jp/blog-category-33.html

(10) 謝辞

報告者は北朝鮮の研究者なので北朝鮮への渡航を希望したが、①日本大学は北朝鮮への派遣による渡航を許可しない、②当該時期に北朝鮮は外国人一般の観光を再開していなかったことにより、北朝鮮での現地調査はできなかった。

そのため、北朝鮮と比較的関係が良く、費用等の問題で自費や学部の研究費では渡航が困難なキューバやタンザニアについて、当該地域の研究者などから意見を聞き検討した。しかし、移動時間や言語の問題があり、選択には至らなかった。

結局、「外国人観光客のいわゆる自由旅行を一切認めていない」という非常に限定的な理由を根拠にブータン派遣を申請したわけだが、その申請について様々なアドバイスや支援をしてくれた本学研究事務課の職員の方々に深い謝意を表明する。

本報告書には書ききれなかったが、今回のブータン訪問は、全く想定していなかった「王国」という意味から北朝鮮とブータンを比較する良い機会となった（これについては、上記研究会における報告でも少し触れられている)。

以　　上